

東京 IPO 特別コラム

2019年2月5日 Vol.140

急騰した創薬ベンチャー、サンバイオ株の大崩れ

昨年12月のソフトバンクショックに続き、サンバイオショックが2月の株式市場の話題となっている。サンバイオ(4592)は2015年4月にマザーズ市場に上場した創薬ベンチャー。公開株数は400万株、公開価格は2000円、公開時の時価総額は872億円だった。つまり公開時に80億円を集め、創薬事業を本格化させたということになる。同社は米国で創業されたが薬事法改正で日本が世界の再生医療の中核を担うということ为背景に日本に拠点を移し上場を果たした企業である。外傷性脳損傷薬や慢性期脳梗塞薬としての再生細胞薬「SB623」の開発・治験により販売承認を目指している。IPO後の2年間は認知度も低く、他の創薬ベンチャーが人気化する中で鳴かず飛ばずの株価推移が見られたが、一昨年後半あたりから上昇トレンドが始まった。とりわけ昨年の後半以降の株価上昇は顕著で、投資家の期待は治験の進展以上に高まりを見せた。

結果として昨年6月25日の株価2421円は本年1月26日の高値12730円まで5.3倍にまで急騰。全体相場が調整を続ける中での株価急騰だけに同社株を保有する多くの個人投資家にとっては頼みの綱だったのかも知れない。創薬ベンチャーはマザーズ市場の代表的なセクターとしては既に20社ほどが上場しており、リスクを十分に認識した投資家にとっては関心の的となっており、治験の進捗を拠り所として価値評価を行いながら投資をしていく流れがある。サンバイオについても米国での慢性期脳梗塞薬のフェーズ2bの臨床試験結果に期待が集まったものと見られるが、全体相場が不調な中で個人投資家の過度な期待が集まり過ぎた結果、株価は時価総額6300億円台という異常な水準まで跳ね上がってしまった。

治験の結果が良好だったとしても既にこの時価総額は異常とも考えられたが、1月29日付で発表された治験の結果は残念ながら有効性は確認できずに投資家の期待は一気に失望に変わった。その結果、翌1月30日から大量の売りが出され、2月4日まで4日連続のストップ安を演じてしまった。その日になって森社長はあるメディアで夢の薬の開発は諦めていない旨のメッセージを発したようだ。

こうしたメッセージが投資家に認識されたのか5日目となる本日はようやくストップ安は避けられた。800万株余りの売り注文に対して積極的な買い注文も見られPTS(夜間取引)相場を睨みながら前日比1270円安の2440円で寄り付いた。その後一時2401円(高値比▲81.1%)の安値がついたが、断続的な売り物を消化し2880円まで小戻す展開が見られ終値は2620円。出来高は5,356万株に膨らみ、売買代金の合計は1,373億円となった。明日以降の株価変動にも関心が寄せられる。

このように急騰後に大崩れを余儀なくされた人気の創薬ベンチャー株の値動きを見るにつけ、投資家が肝に銘じるべきリスクの存在を改めて知ることになった。こうした出来事は今後も起こり得る。また、これは創薬ベンチャーだけに起こる出来事とは

東京 IPO 特別コラム

言い切れない。IPO後の株価の変動の中で需給関係のみで異常人気を呈した銘柄へのリスクをしっかりと認識して取り組む必要があるだろう。前代未聞の創薬ベンチャー株の波乱を他山の石としてIPO銘柄で運用される投資家の皆さんへ本コラムからもメッセージとしてお伝えしておいた次第だ。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)